

## 第三章 勃発

「宗教にはこんなにも多くの悪事をそそのかす力があつた」

ルクレティウス

大事件を取り扱う歴史家はいつも、暴動や反乱に先立つ静かで微かな要因を追跡することの難しさに悩まされる。彼は多くの原因を発見し、それらをしかるべく記録するだろう。しかし、いつも何かほかの原因が記録から漏れていることにも気づいているだろう。変化する世論の波、関心、支持、気まぐれの底流、不合理な心情、無知による偏見の渦。これらがあまりにも多く存在し、あまりにも複雑に作用して嵐を引き起こしているのだ、これら全てを観察・評価し、それぞれが嵐の発生に与えている影響を見積もるのは、人間の知性と努力の限界を超えている。小さな出来事の記録者はさらに大きな困難に直面する。彼は不十分な判断材料しか持たないし、資料も判読が困難なものだったりするからだ。

一八九七年の大規模な部族蜂起の原因をはっきり述べようとすれば、今述べたような困難はさ

らに増す。なぜなら、ヨーロッパ人はアジア人特有の動機や価値観を推し量ることができないからだ。しかし、この部族蜂起の原因は何かという問題を放置することはできない。細かいことは無視するとして、私はなんとか最も重要で明確な原因、つまりインド亜大陸において英国が直面してきた原因をいくつか示したいと思う。

「前進政策」上、特筆すべき事案はチトラルの保持である。駐屯地、道路、部族民による兵隊といったものは部族民に文明への接触や文明の発達をもたらす。いくら独立心が強いと言っても、部族民の多くは、事実上自由が奪われるまでは、物質的な豊かさが増すことによって宥められ、服従し続けるだろう。チャクダラとマラカンドに英国旗が翻っていた二年の間に、スワート渓谷の貿易量は約二倍に達していた。文明化の太陽が山々の上にとともに、美しい商業の花が開き、それまで野蛮という冷気によって凍結していた需要と供給の流れは溶けだした。住民の多くは文明の温情に浴し、新たな富と快適さを享受していた。二年間に渡ってチトラルは銃で撃たれる恐怖から解放された。郵便袋が盗まれることも、配達人が殺されることもなかった。かつては軍隊が担当していた、恐ろしい山岳民同士の争いごとの仲裁に、文官が危険を感じずに赴くことができた。

しかし、ある階級の人々は鋭い理解力と激しい敵意を以て、英国の影響力の接近を見ていた。

アフガン国境の聖職者たちは、すぐさまチトラル街道の重要性を完全に理解した。敵対心の理由はわかりにくいものではない。文明との接触は、ムラーたちの富と力の源泉である無知や妄信を突き崩す。妄信の力を知らず知らずのうちに弱める文明化や教育に対抗してインド亜大陸における宗教勢力が結集することは将来における危険の一つだ。ここにおいて脅かされたイスラム教は抵抗した。広く、しかし静かな扇動が始まった。伝達者が部族の間を往来した。戦争——聖戦のささやきが民族に情熱と狂信を吹き込んだ。合理的な精神には理解できない、巨大で謎めいた力が動いた。北方の粗野な渓谷が生み出すものよりもととずる賢い指導者たちが準備を進めた。南方、つまり英領インドからは秘密裏に激励が届いた。カーブルからは実際に支援が来た。

無知と妄信の奇妙な薄明りの中で、超自然的な恐怖と疑念に責め立てられ、そして狂気に満ちた栄光の希望に魅かれて、部族民は偉大な出来事を期待するようになった。何かが起こる。民族と信仰にとって偉大な日が目前にある。今やその時が到来しようとしている。みな刮目して待たなくてはならない。山々はぎっしり詰まった爆薬庫のようになった。ただ、火種だけを欠いていた。

やがて時は来た。状況の奇妙な取り合わせによって蜂起の可能性は高まっていった。ギリシヤに対するトルコの勝利、「聖戦」に関するアミール（君主）の本の流布、イスラム世界のカリフ

の地位に就くというアミールの思い込み、そして、アングロ・インディアン紙の思慮の浅い記事（同紙の『イスラム教の復活か?』という類の記事は、最も扇情的な地元紙のたわいもない記事よりも、地元の教養ある人々に影響を与えた）。これらのことが組み合わさって、イスラム教における「ブーム」を生み出した。

幸運なことに、蜂起に欠かせない人がいた。カトリック教会の普通の司教や枢機卿たちに隠者ピエールがいたように、アフガン国境の普通の聖職者たちには狂信的なムラーがいた。粗野な狂信者が神聖な使命と不思議な力を人々に確信させ、異教徒に対する聖戦を呼びかけた。地雷が火を噴いた。炎は地面を走った。四方八方に向かって爆発が起こった。反響はすぐには消えなかった。

英領インド政府と部族民の間を取り持っていた注意深い外交官たちですら、蜂起の準備が大きく広がっていたにもかかわらず、それに気付かなかった。こうした専門家の間に実際とは逆の見通しや住民感情についての理解があったのは奇妙なことで、まるで物事を良く知る者ほど何も知らず、研究者の精神がより論理的であるほど研究対象を理解できない、というような状態だったと言えるだろう。入念に情報を集め、状況をよく観察する有能な人々であっても、あらゆる場所に蓄積されつつある潜在的な力に全く気付かないということはある。六月にマイザルで起こった

敵対行為が引き金となった。だが、だれも危険を察知しなかった。七月初めになるまで誰も上スワートで狂信的な動きがあることに気付かなかった。その時点になつても、狂信的な動きは深刻なものとは見なされず、過小評価された。狂信的なファキール（苦行僧）の到来は知られていた。彼の力はまだ秘められていた。だがこの秘密が明かされるまでに、そう時間はかからなかった。

狂信が無知で好戦的な東洋人にどのように作用するのか。これを完全に把握することは、残念なこと現代のヨーロッパ人にとっては、不可能でないにしても困難だった。西欧諸国が宗教論争で剣を振るっていた時代からすでに何世代も経過している。暗い過去についての邪悪な記憶は、合理主義と人道主義の強く澄んだ光の中でたちまちのうちに消え去っていった。残酷さと不寛容によつて墮落し歪んだことはあつても、キリスト教は人々の情熱に影響を及ぼし、狂信が暴力的な形で発露されるのを常に防いでいる。それは我々が予防接種で天然痘から守られているのと同じことだ。だが、イスラム教は不寛容な怒りを煽ることはあつても鎮めることはない。イスラム教はもともと剣によつて広められたものである。以来、イスラム教徒は、他の宗教の信者よりもはるかにこの狂気の影響下にある。労苦の成果、物質的繁栄の見込み、死への恐れ、そういったものはたちまちのうちに脇に追いやられる。感情的なパシュトゥーン族であればなおさら狂信に抵抗できない。合理的な考えは忘れ去られた。武器を手に取り、パシュトゥーン族は狂犬のように危険で敏感なガーズイ（イスラム戦士）となつた。部族民の中でも、より豊かで信心深い者が

残酷なエクスタシー（法悦）で身悶えしている一方で、より貧しく即物的な者は他のこと、つまり略奪への期待や戦闘自体の楽しさに刺激されていた。そして、部族民全員が蜂起した。トルコ人が敵を撃退し、スーダンのアラブ人が英軍の方陣を破るように、インド亜大陸の辺境における蜂起は遠くまで広がる。そのいづれにおいても西欧文明は武装したイスラム教と対決させられる。進歩の力は、それへの反動と衝突する。血と戦いの宗教は平和の宗教と対峙する。幸運なことに、平和の宗教の軍事力の方が優っているのだが。

人々がこんなにも簡単に信じるとは、考えられないことだ。狂ったムラー（ファキール）が人々にマラカンドやチャクダラを攻撃するからついてこいと命じたら、ふつうは人々が拒否するはずだろう。だが、狂ったムラーは奇跡を起こした。彼は家において、人々から少しばかりの食べ物や金銭を贈られた。彼は贈り物の礼として少しばかりのコメを渡した。彼の蔵は常にいっぱいだったので、彼は何千人でも養えると言い張っていたらしい。彼は夜になると姿が見えなくなると断言していた。人々が彼の部屋をのぞくと、誰もいなかった。こうしたことで人々は驚嘆した。とうとう彼は異教徒を撃つと宣言した。彼は助けを求めず、この栄光を誰とも共有するつもりはなかった。天国の扉が開き、軍隊が降臨するだろう、と語った。彼が助けを拒絶するたび、彼を支援しようとする人々は増えた。ある時、彼が人々は不死身だと言った。私はある巻物を見せられたことがあるのだが、そこには、カーバ神殿から七度以上上空、天国にある異教徒に殺されたガ

ーズイ（イスラム戦士）の墓が描かれていた。ある時、部族民が、英軍を襲って敗れ、四分の一の死傷者を出して逃げ帰ってきた。だが、こんな戦いの後でも生き残りの部族民の信仰は揺るがなかった。ムラーは、信仰の足りない者だけが死んだ、と言った。そして、打撲傷を見せてこう言った。これが十二ポンド榴弾砲が我が神聖なる身体に与えた唯一の結果だと。

私はいま、ようやく原因と理論の荒海から結果と事実の堅い地面に移動する。マラカンドキャンプに届いた、上スワートと周辺の部族における煽動に関する噂や報告は、駐屯地のパシウトウーン人傭兵たちには正しく理解されていた。七月も何日かが過ぎると、指揮官たちの中には、兵士たちから大変な事態が迫っていると警告される者も現れた。インド駐在官のデイン少佐は強い懸念を抱きながら、日々進展する狂信的な動きを注視していた。常に危険に曝されている辺境の関係者の中に、人騒がせな人物だと思われる者などいない。だが、とうとうデイン少佐は不穏な兆候について公式に報告せざるをえない気持ちになった。そして、警報が様々な部署の士官たちに発せられ、兵士たちが招集された。七月二十三日までには全軍に対して、事態は切迫しており、すべての予防措置をとるようにと指示が伝達された。だが最後まで、誰もが本当に蜂起などあるのか、また、蜂起があつたとしても小競り合い程度なのではないかと疑っていた。現地人は友好的で敬意を抱いていた。スワート渓谷は富で満たされ微笑んでいた。一週間後の変化を誰も予期できなくても不思議ではなかった。数日後に殺し合いになること、平穏な風景の中で銃

や剣を運ぶことになること、ポロ競技場が騎兵突撃の場に転じること、これまで長らく一緒に静かに暮らしてきた陽気な未開人たちが狂信的で獐猛な野蛮人と化すこと。こうしたことは誰もが想像できなかった。頭を迅速に完全に切り替えることは誰にもできなかった。

その間にも、迫りつつある戦争についての噂はより奇妙でより強烈なものに成長していた。インド亜大陸のバザール（前世紀のロンドンのコーヒー・ハウスのようなもの）では想像力豊かな人々によつて素晴らしい話が広がっていた。大したことのない事実が元の姿をとどめないほどに誇張・変形され、そこから何千もの粗野で不合理で信じられないような結論が導き出されていた。そしてこれらの結果は事実として流布された。こういった状況が続いていたが、多くのウソの中には重要な情報が含まれていることもあった。バザールでの噂は現地人の意見を示しているだけでなく、真実の種を宿していることもある。東洋ではニュースは奇妙なチャンネルを通じて、そしてしばしば不可解な速さで伝わる。七月も何日か経過し、マラカンドのバザールでは狂信的なファキールについての噂が行き交っていた。彼の奇跡は尾ひれをつけて口から口へと伝えられた。

イスラムにとつての偉大なる日は目前だ。強力な男が人々を導くために立ち上がった。イギリス人たちは一掃されるだろう。次の新月までにはイギリス人は一人も残っていないだろう。偉大なファキールは山々に強力な軍隊を隠している。時が来れば、この軍隊は、騎馬に乗って、徒歩



で、そして大砲を携えて、打って出るだろう。そして異教徒を打ち破るだろう。ムラー（ファキール）が「天使たちがあまり早くに現れてはいけなから、ある丘には誰も近寄ってはいけない」と命じたということさえ伝わっている。このように噂は続いた。しかし、これらのたわいもない嘘の中に、厳粛な警告が含まれていた。

英国の将校や役人は、公式には部族民の集結に関する報告に注目したり、自分たちの部署の安全確保に努めたりしなくてはならなかったが、個人的には、何か深刻な事態が迫っているのではないかと探っていた。

七月二十六日の午後、マラカンド駐屯地の準大尉たちや若手将校たちはポロをしようとカルに向かっていた。カルにはチャクダラ要塞からラトリ中尉が来ていた。このときの試合は好い試合だった。周辺の村に住む部族民が小さなグループに分かれて、興味を持って試合を見ていた。外見からは彼らの考えや意図はわからなかった。若い兵士たちは何も見ず何も知らなかったし、何に気を付けるべきかも知らなかったことだろう。蜂起などあるはずもなかった。だが、もし蜂起が既にあつたらそのほうが良かった。部族民は準備万端だった。ポロの試合は終わり、将校たちは馬に乗ってそれぞれの駐屯地に戻り始めた。

辺境の部族ならではの奇妙な出来事が起こったのはそのときだった。厩務員たちがポロ用のポニーにラグや衣類を置き、試合後のグラウンドをうろろしていたところ、試合を見ていた部族民たちが厩務員たちを連れ出し、戦鬪が始まるからすぐに家に戻るように言った。部族民、つまりパシュトゥーン族には何が起こるかわかっていた。狂信の波がスワート溪谷を洗っていた。部族民はこの波に連れ去られるだろう。抵抗することはできなかった。まるで発作が起きるのを知っている者のように、部族民は待っていた。そして部族民は気にはしていなかった。狂った修行僧が来たら、住民は異教徒と戦い、異教徒を殺すだろう。そんなときにポニーに構っている暇はない。ある面では無慈悲な、ある面ではスポーツマンらしい動機と少しばかりの騎士道精神から部族民は同胞の厩務員に警告した。将校たちはヒントを携えて無事に駐屯地に戻った。

同じ日の午後遅く、デイーン少佐はマラカンド守備隊を指揮するミクルジョン准将に、事態は深刻な局面を迎えていると報告した。大軍勢が狂ったムラー（ファキール）の旗の下に集まっており、攻撃の可能性があると。デイーン少佐は旅団を強化するためにコープス・オブ・ガイドを呼び寄せるべきだと助言した。コープス・オブ・ガイドを遅滞なく出動させよとの電報はすぐさまマルダンに向けて発信された。夜八時三十分、コープス・オブ・ガイド連隊の上級士官、エリオット・ロツカート中尉は電報を受理した。午前一時三十分、今やだれもが知っている有名な行軍が始まった。

コープス・オブ・ガイドに連絡した後、午後七時にミクルジョン准将は指揮官たちと会談し、いつでも任務に就けるよう準備せよと命じた。デイーン少佐から報告が入ってきた。今や狂ったムラー（ファキール）とその軍勢がスワート渓谷へと進んでいる。またデイーン少佐は四マイル先のアマンダラ峠を保持するべきだと進言した。ミクルジョン准将は進言に従って、以下の兵力で構成される部隊の編成を命じた…

第四十五シーク連隊

第三十一パンジャブ歩兵連隊から二個中隊

第八山岳砲兵隊から大砲二門

第十一ベンガル騎兵連隊から二騎兵大隊

この兵力は、第四十五シーク連隊のマクレー中佐の指揮の下、夜中に出勤することとなった。また、午前三時にはミクルジョン准将指揮下の残りの部隊の支援を受けることとなった。

準備は全て迅速に行われた。午後九時四十五分、通信回線が切断される直前にチャクダラからの電報が届いた。パシュトウーン族の大軍が駐屯地に向かっていているとのことだった。十五分後、

インド人の騎兵士官がニュースを携えて現れた。引用してみよう…「例のファキールがカルを通過し、マラカンドへと進んでいる。兵も人々もファキールに対して何もできないだろう。マラカンドキャンプの東側の丘は、パシトウーン族で一杯になっている」

ポロの試合に行っていた将校たちは、帰ってきたとたん大量の仕事に追われた。音楽隊員や武器を持ってない若者たちは要塞に行くよう急かされた。輸送手段、食糧、そして弾薬の発注書を作らなくてはならなかった。しなくてはいけないことは多かつたが、時間はほとんどなかつた。ついに全てが成し遂げられ、部隊は早朝の出発に備えることができた。午後九時半、ポロの服装から着替える間もないまま、将校たちは夕食をとった。午後十時、将校たちは迫りくる敵軍に関する見通しについて議論したり、熱心に戦闘の可能性を予測したりしていた。血気盛んな者は小さな戦闘があるだろう、ただし小競り合い程度だろうと主張した。まだ実際に戦場に行ったことのない者の多くは思いがけない機会を喜んだ。年上の経験豊富な者たちは、この事件を暴動の類と見なしていた。彼らは部族民に発砲しなくてはならないだろうが、スワート溪谷の住民は臆病者だから英軍に向かってこないだろうと思われた。まだ勝算はあつた。

夜の静けさの中、突然、「クレーター」キャンプの練兵場に集合ラッパが鳴り響いた。全員が飛び起きた。「集合」の合図だった。将校が剣をつかみ、急いでベルトを締めているつかの間、

そこには静けさがあつた。集合ラツパは単に援軍が来たことを告げているのに過ぎないと考えていた数人の将校は煙草をふかして待っていた。すると、あちこちからマスケツト銃の発砲音が轟いた。それは、これから六昼夜、休みなく鳴り響く音だつた。

マラカンドキャンプへの攻撃と偉大なる辺境戦争が始まつた。

銃声は山々にこだました。こだまは今も鳴り響いている。一つの谷に広がつた音の波は隣の谷へと伝達され、この山岳地域全体が無秩序な騒々しさに揺さぶられた。この振動は細い電線と長いケーブルによつて遠く西欧諸国まで伝えられた。遠いヨーロッパ大陸に住む人々は、この振動の中に衰退の鈍い不協和音を感じ取つた。イギリスにいる家族は、銃声が彼らの愛する息子や兄弟や夫の死を運命づけるのではないかと恐れた。賢く見える外交官も、心配そうな経済専門家も、不可解だつたり知つたかぶりだつたりする愚かな人々も、みな鳴りを潜めた。しかし、この戦争は、何千という命が犠牲となり、何百万という金が費やされるまで終わらないような類のものだつた。

(二〇一八年三月三十日、仮訳)